

Festival Hirondelle



www.festivalhirondelle.com

Association Amirondelle

siège . Lescure | *antenne* . La Mairie
15230 Pierrefort | 12600 Thérondels

Festival Hirondelle 2018 《Japonisme》

日本語実施概要

主催: Association Amirondelle

所在地: Lescure, 15230 Saint Martin sous Vigouroux

代表: Michel Couillaud

連絡先:

原裕子 (2018 年音楽祭芸術監督、Quatuor Ardeo 所属)

yukohara_va@yahoo.co.jp

tel. +49(0)157 85459483

<http://www.quatuorardeo.com>

Mathilde Liffraud (事務局窓口)

m.liffraud@gmail.com

音楽祭趣旨:

2016年8月にチェリストのジョエル・マルティネスが創設した室内楽の音楽祭、フェスティバル・イロンデル (Festival Hirondelle)。レスキュール城におけるアミロンデルが企画・構成を行い、フランス中部・カンタルとアヴェロンの隣り合う二県で合計四公演を行う。地域で唯一の貴重な存在であるこの音楽祭の名前は、このふたつの県境を流れるイロンデル川と、空を舞うツバメ(=フランス語でHirondelle)のイメージに由る。毎年ひとつのテーマを決め、それに沿って曲目をプログラムを組むこと。自然豊かな地域で計四ヶ所の演奏会場を選び、普段コンサートの開かれないような環境で演奏をすること。音楽に誘われて人が地域内を動き、音楽家・聴衆共にその年のテーマを味わい尽くす、というコンセプト。フランスの田舎を舞台に、音楽を通じて人と人が結びつく、小さくもあたたかみに溢れた、美しい音楽祭。

* 音楽祭のホームページ: <http://www.festivalhirondelle.com/>



過去二回の活動実績:

2016年8月23日から26日にかけて、音楽祭第一回が行われ《東西南北》をテーマに掲げ、各回のコンサートがそれぞれ四つの方角へ旅をするような形でプログラミングされた。ジョエル・マルティネスほか、ヴァイオリニストの梁美沙、ピアニストのクセニア・マリアレヴィチ、ソプラノ歌手のアマヤ・ドミニゲス、打楽器奏者のヴァッシレーナ・セラミフォヴァといったフランスの若手音楽家を代表する五人が集結し、パリを拠点に国際的に活躍するダンサーエロディ・シカール が加わった舞踏と音楽のコラボレーションも行われ、大好評のうちに幕を閉じた。

* 総集編ショートビデオ: <https://www.youtube.com/watch?v=1woac3ljNFc>

音楽祭第二回は、ジョエル・マルティネスが所属するフランスの若手を代表するアルデオ弦楽四重奏団（キャロル・プティドマンジュ、梁美沙、原裕子、ジョエル・マルティネス）に、ピアニスト ノアム・グリーンベルクとチェリストのルイ・ロッドが加わり、2017年8月17日から20日にかけて行われた。テーマは《水面に映るバッハ》として、音楽の父・バッハを中心に、ベートーヴェン、シューマン、イザイ、ショスタコーヴィッチ、ニノ・ロータに至るまで、バッハにまつわる名作・隠れた名作の数々が演奏され、好評を博した。各コンサートの後には、会場近くの広場で地元の酪農家が屋台を出すような形で夕食が提供され、夏の夕暮れの中、音楽家と聴衆が共に楽しく時を過ごす素敵な場所となった。

* 総集編ショートビデオ: <https://www.youtube.com/watch?v=RTObMbeG2sk>

今夏の事業概要:

2018年8月15日から19日の五日間、《ジャポニスム》をテーマとして音楽祭第三回の全四公演と、アクティビティの一日《ジュール・オフ》を行う。

過去二回の実績同様、観客延べ人数五百人程を見込む。

テーマ《ジャポニスム》:

今夏、ジョエル・マルティネスに代わり、ヴィオラ奏者の原裕子(マルティネス同様アルデオ弦楽四重奏団所属)が音楽祭の芸術監督を務める。まず考えたのは、このフランスの田舎の美しい小さな音楽祭に、自分がやるからこそそのテーマを選び、紹介したいということ。ヨーロッパに住む日本人音楽家として常々考えている、日本的・西洋的ということに改めて注目したいとの思いで、《ジャポニスム》をテーマとした。

奇しくも、2018年は日仏交流160周年の年として、フランス各地で日本に関連する展覧会や音楽会が開かれる由。日本の伝統芸術・文化を純粋にフランスに紹介するイベントが目白押しだが、フェスティバル・イロンドンでは、日本と西洋の音楽が相互に影響し合った歴史に想いを馳せ、今日の音楽を展望する。十九世紀末、パリ万博をきっかけにヨーロッパで旋風した《ジャポニスム》の時代の音楽（ドビュッシー、ラヴェル）から発し、その後の日本人作曲家による西洋音楽作品（武満、野平、細川）、また、彼らと友好的・音楽的交流があり、日本を愛した作曲家（ケージ、ストラヴィンスキー、メシアン）の作品を中心にプログラミングする。現代の若手を代表する奏者たちがヨーロッパ各地から集まって共に演奏し、クラシック音楽における「日本の美意識」というものを様々な視点から感じ、聴衆に感じてもらう場にしたい。歴史の中で紡がれてきた、時空を超えた芸術的インスピレーションの輪を、私たちの小さな音楽祭であらたに作る事ができたら、願ってもない。



開催内容:

コンサート1 《世紀末》

2018年8月15日18時から、ブルゾン教会にて

音楽祭第一回目のコンサートは、十九世紀末のパリを舞台に始める。《ジャポニスム》が旋風を巻き起こし、当時の新進芸術家たちが過去のアカデミックな伝統を壊していく大きな動きのきっかけとなった時代である。パリ万博で紹介された北斎画の数々や、東洋音楽、日本音楽に触れ、大変に感化されたドビュッシーによる「プレリュード」、「版画」、「イマージュ」、また、晩年の「ヴァイオリンソナタ」（ドビュッシーによると第二テーマは尺八のイメージである）と「チェロソナタ」を演奏する。今年没後100年を祝うドビュッシーへのオマージュとして、2012年に作曲された、野平一郎による「ヴィオラの園〜ドビュッシーの追憶に」を演奏する。日本国外では今回が初演となる。また、後にフランス音楽に大変影響を受けた武満徹は、音楽祭の中心的存在として多く取り上げるが、この日は、ピアノのための「閉じた眼」（十九世紀末のルドンによる同名の絵画にインスピレーションを受け、作曲されたもの）を演奏する。

コンサート2 《俳句》

2018年8月16日18時から、ニグルセール教会にて

「俳句」という、少しの言葉で多くを語る世界を音楽で体感しようという、特別な趣旨を持ったコンサート。バッハの音楽的手腕が凝縮された二声のためのインヴェンション（2017年の音楽祭のテーマ《水面に映るバッハ》へのちょっとしたオマージュでもある）の計十五曲の合間に挟むようにして、様々な編成の現代の作品を演奏する。日本を訪れ、武満徹との交友が深かったメシアンとジョン・ケージそれぞれによる「七つの俳句」からの抜粋、後に武満徹を世に送り出すきっかけとなった人物であるストラヴィンスキーの小品、現代の日本を代表する細川俊夫によるピアノのための「エチュードⅢ 一書、俳句、ひとつの線」、ハンガリー人作曲家クルタークによる弦楽器のソロ・デュオ・トリオのための「サイン、ゲーム、メッセージ」など。どれも、驚くほど短いですが、音が凝縮していて、聴く者の心に触れ、想像力を喚起する、俳句の美意識に通じる作品たち。

《ジュール・オフ》

計四回のコンサートの間に当たる2018年8月17日に、ロサック湖畔にて、《ジャポニスム》を味わう様々なアクティビティを企画する。音楽家も参加し、聴衆と共に一日を楽しもうという趣向。この地方の豊かな自然を味わう数時間のハイキング、地元のチーズやパンをはじめ、作曲家武満徹のレシピも交えたビュッフェ式のピクニックを楽しんだ後、丘の上のチャペルにて、ふたつのミニ・コンサートを行う。パリ在住の箏奏者、高橋雅芳を招き、世紀末の時代にフランス人が聴いたであろう日本の伝統楽器を楽しむ機会を作る。ギタリストのジェイコブ・ケラーマンによる無伴奏のコンサートでは、武満徹の小品や、彼が愛したジャズの名曲などを。チャペルでは、パリ在住のアーティスト、パスカル・ソフィ・カパリスの展覧会も行い、2017年にアワガミ・ファクトリー・レジデンス・アーティストとして四国香川の和紙工房に滞在した際の商品をご覧いただく。また、在フランス・クレルモンフランの俳句会によるワークショップを計画。日が暮れる頃に、武満徹が作曲家として関わった映画、勅使河原宏監督の「他人の顔」を湖畔の広場で野外上映予定。



コンサート3 《妖精の旅》

2018年8月18日18時から、セントマリー教会にて

日本を代表する作曲家、武満徹のヴァイオリンとピアノのための「妖精の距離」、ピアノのための「子供のための小品」を演奏し、武満の世界に住む妖精がドイツ・ロマン派へと誘うコンセプト。シューマンのクラリネットとヴィオラ、ピアノのためのトリオ「おとぎ話」、クルタークによる同じ編成のトリオ「シューマンへのオマージュ」、チェロとピアノによるシューマンの「幻想曲集」、そしてシューベルトの「アルペジオーネソナタ」をギターとヴィオラのデュオ版で演奏する。

コンサート4 《鳥》

2018年8月19日18時から、アルビニャック教会にて

音楽祭に鳥の名前がついていることにちなみ、《ジャポニスム》と《イロンドン》を賛歌する最終日のコンサート。フランス・バロックのラモーによる「鳥の歌」をギターで、武満徹によるヴィオラとピアノのための「鳥が道に降りてきた」に続き、二十世紀の名曲、メシアンによるクラリネット、ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための「世の終わりのための四重奏曲」を演奏する。鳥のモチーフがあちこちで現れるこの四重奏曲は、第二次世界大戦中に作曲家が捕虜となっていたドイツの収容所にて作曲された。作品の前文より・・・「深淵とは時間とその寂しさ、その疲労。鳥は時間の対極にある。光、星、虹、そして歓呼の歌への我々の渴望である！」

ラヴェルによる美しい「楽園の三羽の鳥」を全員で歌い、音楽祭のフィナーレを飾る。（開演前に聴衆のための歌のリハーサルを開催！）

参加音楽家:

原裕子（ヴィオラ奏者、音楽祭芸術監督代理）

ジョエル・マルティネス（チェリスト、音楽祭芸術監督）

ミルカ・スチェパノヴィチ（ヴァイオリニスト、セルビア人、スイス・バーゼル・シンフォニエッタ所属）

ジェイコブ・ケラーマン（ギタリスト、スウェーデン人、デュオ・ケミ所属）

マクシミリアン・クローメ（クラリネット奏者、ドイツ人、ドイツ・カンマーフィル・ブレーメン所属）

マルコ・シリローニ（ピアニスト、イタリア人、スイス・バーゼル音楽院伴奏助手）

高橋雅芳（箏奏者、ジュール・オフにおけるゲスト）

* 原裕子プロフィール: 1987年生まれ。東京藝術大学附属高校を経て、同大学を同声会賞を得て卒業。菅沼準二、川崎和憲の各氏に師事。スイスにてジュネーヴで今井信子氏、バーゼルでライナー・シュミット氏（ハーゲンクアルテット）に学び、両音楽院修士課程修了。第九回ライオネル・ターティス国際ヴィオラコンクール特別賞、第五回東京音楽コンクール二位、第七回大阪国際室内楽コンクール三位、青山音楽賞バロックザール賞受賞など。チューリッヒ歌劇場オーケストラとドイツ・カンマーフィル・ブレーメンにてアカデミー生として研修を積み現在も演奏に加わるほか、ヨーロッパ各地で活動。ラ・フォル・ジュルネ音楽祭、ザルツブルク音楽祭、ダボス音楽祭などに出演。シュヴェツィンゲン音楽祭宮廷音楽アカデミーやチューリッヒのラ・シンティアラ、フライブルク・バロック・オーケストラへの参加など、古楽器での演奏にも力を入れている。パリを拠点とするアルデオ弦楽四重奏団所属。



収支計画:

全体予算28,750ユーロ。約383万円。フランス各地方自治体、Spedidam 財団と、個人スポンサーによる支援。日仏の様々な文化・交流を支援し、今回の《ジャポニスム》をテーマとした音楽祭の趣旨、意義にご賛同いただける団体、企業、個人からの協賛や、宣伝のタイアップを募集中。

